



小松謙助と 社会教育協会

学校法人白梅学園理事 樋口 秋夫

白梅学園は財団法人社会教育協会によって昭和十七（一九四二）年に設立された東京家庭学園を母胎とする。協会
は、家庭教育を社会教育の重要な一環として位置づけ、その
将来を担う青年女子に精神的科学的教養を授けるための
学校設置を計画したのであった。したがって、白梅学園と
社会教育協会は同じバックグラウンドをもったひとつの歴
史を共有するのである。この意味で社会教育協会と創設者
小松謙助について語ることは、とりも直さず白梅学園を知
ることに他ならない。

小松は、明治十九（一八八六）年二月、商家の四男とし
て現在の福島県二本松市に生まれた。郷里で小学校を終え
た後、仙台の東北学院に学び院長デー・ビー・シュネーダ

ーの薫陶を受けた。

明治三十八（一九〇五）年、上京して東京府教育会で働
きながら、講義録などにより政治経済や語学を独習する。
明治四十二（一九〇九）年には黒岩涙香が主宰する万朝報
の記者となった。新聞人としての歩みがここにはじまるの
である。

大正三（一九一四）年には東京朝日新聞に転じ社会課次
長、大正九（一九二〇）年には東京日日新聞（毎日新聞）
に移り学芸課長などを歴任する。この時代の小松に関して、
朝日新聞の僚友美土路昌一は「政治記事なども社会部的に
扱うなど記事の開拓と紙面の刷新に貢献をした」と語って
いるが、生来の正義感や直情などで組織人としてはぎくし

やくすることもあった一方、非常に研究熱心な記者だったようである。

大正十四（1925）年三月、小松はそれまでの新聞記者としてのキャリアに終止符を打つこととなる。たまたま芸欄に掲載された、本荘可宗の論文「宗教の価値と必要」に不敬の文字があるとして東京地検の取り調べを受けるという事件が起き、その責任を一身に負って退社したのであった。

そして同年十一月、社会教育普及振興の活動をはじめることになる。当時、社会教育は学校教育に比べ整備の遅れが歴然としていたが、文部省に担当部局が新設されるなどその機運が熟してきたのであった。小松はこれに呼応し財団法人社会教育協会を設立したのである。設立趣意書によれば、「わが国家社会の中堅となるべき人々の知能の啓発、人格の向上に貢献したい」という目的であった。時に小松三十九才、その発意には自身の勤労学生体験や独学経験、そして東北学院時代に感化を受けたキリスト教の影響も少なからずあったと思われる。

なお、社会教育協会は会長に阪谷芳郎男爵、理事長には法学者で東大教授の穂積重遠博士、小松自身は常務理事に就任し、また多くの協力者・理解者の温かい支援を得ての発足であった。この中には、朝日新聞時代の僚友緒方竹虎、美土路昌一をはじめ、親交のあった中央法律家協会の片山

哲、星島二郎、牧野英一、牧野良三、岩田宙造、また財界の正田貞一郎、明石照雄など後々まで小松の事業に深く関わって行く人物の名前を見いだすことができる。

しかし、社会教育といっても当時は方法も体制も確立していない時代である。わずかに青年団活動が知られる程度であったが、これは官主導の国家体制を維持する運動の側面が強いものであった。

このような状況下、協会はそれこそ何の基盤もない民間団体として歩みはじめた。したがって、国からはもちろんのこと篤志家などの財政的な支援を期待できるわけでもなく、当初は事務所も文京区小石川にあった小松家の書斎であり、時には家族全員が手伝いに駆り出されるといった実状であった。

そんな中、小松は文書メディアの活用に向か性を見いだし、その具現化されたものとして指導者向け『社会教育パフレット』、青年層向け『民衆文庫』などを創刊した。文書や紙面はそれまでの「講義録」といったものとは一線を画した読みやすくユニークなものであり、当時としては斬新なものであった。記者時代は紙面刷新に熱心であった小松の経験が随所に生かされていたのはいうまでもない。さらに協会では充実した講師陣による講習会や講演なども適時開催し啓蒙と教化の両面での活動を展開した。このよ

うに地道であるが着実な活動は次第に世に受け入れられ協
会も年々歳々順調に発展を遂げて行くこととなる。

昭和二（一九二七）年には女子青年団の機関誌『処女の
友』、次いで『婦人講座』、昭和八（一九三三）年には青年
学校向けテキスト『青年学校教科書』、昭和十一（一九三七）
年には『女子青年学習書』というように、当時の社会教育
活動の中核と関わる出版物を手がけるようになる。これら
はすべて全国規模の展開であり、この分野においてはずで
に類例のない有力な団体にまで成長していたのであった。

なお、昭和十五（一九四〇）年には職員数八十有余名を
数え、七月には小石川原町に新社屋を構えている。

昭和十七（一九四二）年、社会教育協会はさらに活動の
場を広げることになる。前述したように社会教育の一環と
して家庭教育を方向づけるため、穂積重遠を園長とした東
京家庭学園、また同時に教育学者乙竹岩造を長とする研究
所を設立したのである。戦時色が次第に濃くなってきた世
相であったが、この学園の内容は決して時流におもねたも
のではなくむしろ教養主義的な自由教育をめざしたもので
あった。小松によればこんな時代だからこそ文化の香りが
必要とのことで、まさにこの言葉を実現したのである。な
お対象者は高等女学校卒業で、第一期生は遠く台湾や満州
からの留学生も含め約百名が入学した。この小石川指ヶ谷

町に設立された東京家庭学園が現在の白梅学園の母胎とな
ったのである。

かくして社会教育協会は戦前の隆盛期を迎えることとな
る。思えば小松家のわずか三坪の書斎を起点としてはじまっ
た活動であるが、拮据十八年ともかくにも獅子奮迅の働
きでここまで発展してきたのであった。この間、小松には
先駆者ゆえの苦勞が絶えなかったが、とりわけ資金面のや
りくりは大変だったという。これも厳しい現実である。し
かし、ようやく端緒についた社会教育の灯を消してはなら
ないという強い信念とこれを支えてくれた温かい友情はこ
れに勝るものであった。

この後社会教育協会は戦時統制による事業の割譲、空襲
で家庭学園を含めた施設建物すべての焼失、戦後の再建な
ど苦難の道が待ち受けているのであるが、これについては
別の機会に譲りたい。

冒頭にもふれたように白梅学園の歩みは、社会教育協会
との関係を抜きにして語ることができない部分がある。こ
の意味で、あえて前史ともいうべき社会教育協会の設立か
ら東京家庭学園に至る経緯を取り上げた次第である。

●参考文献 社会教育協会、別冊『国民』―社会教育に生
涯を捧げた人―、昭和三十七年。